

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第49回）

けんしらぎし

遣新羅使と万葉集（その4）

「瀬戸内海・大島の鳴門（大島瀬戸）」

天平八年（七三六年）、出帆の準備にとまどったのか遣新羅使らは葦あしが散る晩夏六月に難波の港をようやく古来の海上交通路であった

瀬戸内海航路を西下し、筑紫よりもはるかに遠い新羅を目指して出帆している。万葉集・巻15には難波津の出航時から日を追い、瀬

戸内海を西航した歌が並んでいる。前半には「難波津」を船出し、海路の途上や折々の寄港地などを順次、「敏馬みぬま（現神戸市灘区推定）」

「淡路島」「明石の浦」「家島」「玉の浦」などと地名をあげて景観などを旅日記風の詠み方をしている。

「瀬戸内」というと今日の機械船により風光明媚な静かな海と12時間余りで大阪と九州（門司）を結ぶ快適な旅路とは異なり、林田正男著「万葉の歌」では当時の遣新羅使の一行は、瀬戸内の航路に約ひと月かかっていると記されている。

・遣新羅使たち一行の乗船した船は「真楫まかぢしじぬ繁貫き船」であると万葉集に収録されているが、この船は船の左右にそろった櫂（かい）船

を進めるための人力水進具）をたくさん取り付けた手こぎの木造船で船舶の構造や航海術からみて、水手（船乗り）の漕ぐ力よりも、もっぱら潮流と風をたよりにした航海であったろうとの説がある。

・瀬戸内海は灘や湾と呼ばれる比較的広い海域と、瀬戸や海峡と呼ばれる狭い水路で繋がった複雑な構造をしており、外洋から隔った内海は、潮の干満差が大きく、潮流が速いことでも知られている。

・難波津を出航した遣新羅使一行の瀬戸内海の第一の関門は明石海峡であった。幅四キロ足らずのこの海峡は潮流の最高速度は海上保安の調べでは西流七・一ノット（時速十三キロ）、東流五・六ノット（時速十・四キロ）と観測され、古代から海の難所といわれる。

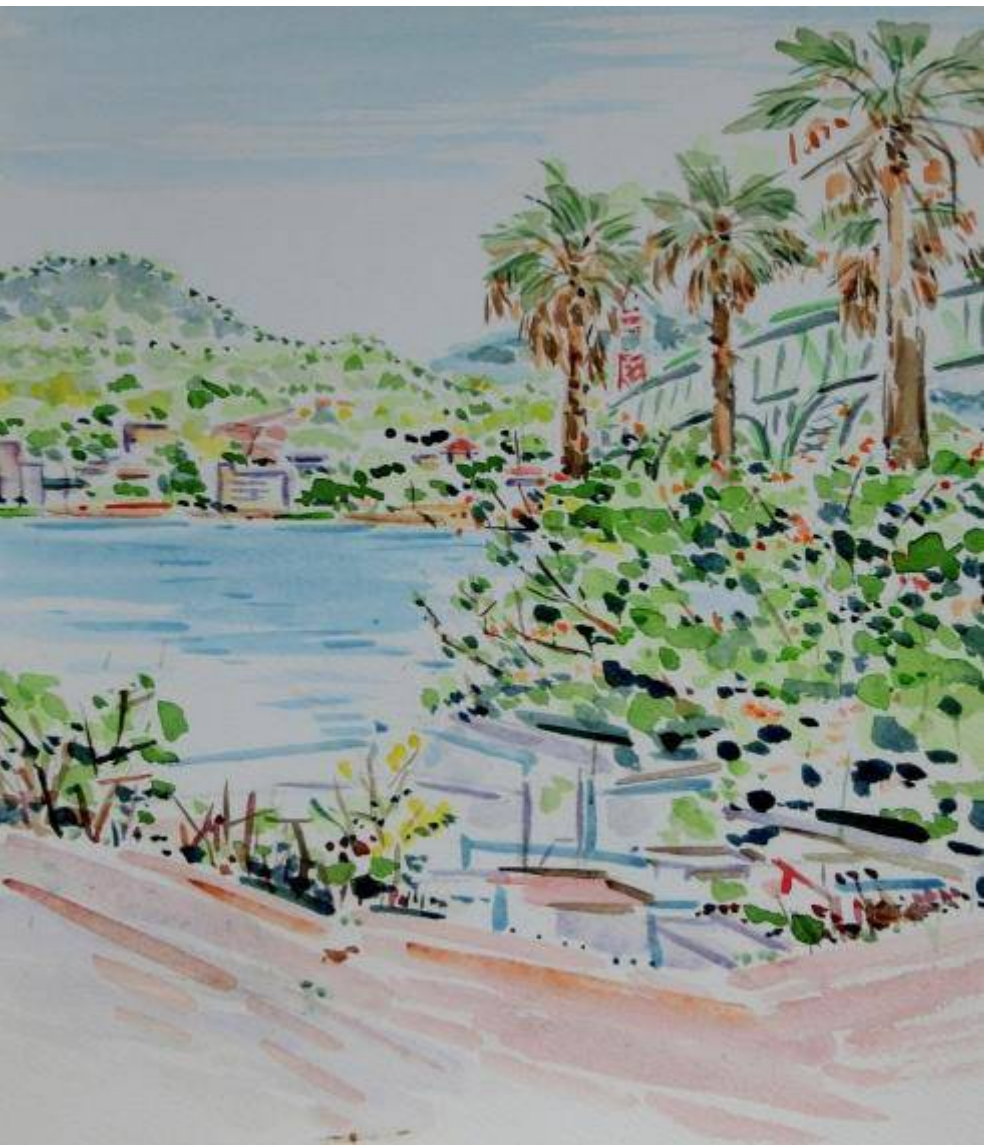
・瀬戸内航路で、その明石海峡にも劣らないといわれていた難所は筑紫（九州）の入口、門司から約160キロ東に位置し、万葉集に

「大島の鳴門」と詠まれている現在の「大島の瀬戸」である。

・大島の瀬戸は山口県東部に位置する柳井市大島地区と南東の瀬戸内海に浮かぶ周防大島（屋代島とも呼ばれる。）の間の瀬戸をいい、阿波の鳴門とならぶ激しい潮流で知られる。

(写生地) 瀬戸内海に浮かぶ山口県大島郡の周防大島(屋代島)から対岸の本土の山口県柳井市の間にある「大島瀬戸」は万葉集では「大島の鳴門」と詠まれる。潮流が速く、日本三大潮流の一つに数えられる。

「大島瀬戸」と昭和五十一(1976)年に完通した大島瀬戸に架かる大島大橋(全長1,020m)を描く。(杏花)



・万葉集に「大島の鳴門」を遣新羅使が詠った次の歌がある。

「大島の鳴門を過ぎて再宿^{ふたよ}を経て後に、追ひて作る歌二首」

お

これやこの 名に負ふ

なると うずしほ

鳴門の 渦潮に

たまも か

あまをとめ

玉藻刈るとふ 海人娘子

ども

卷十五—3638

作者 遣新羅使・田辺秋庭

(解説)これがまああの名高い鳴門の渦潮、その渦潮に棹^{ひょ}さして玉

藻を刈るといふ海人の娘たちなのか!

・都ではここを旅した経験者の間では高い噂になっていたのだ。「こ
れがあの名高い大島の鳴門で渦潮につかって藻を刈る海人おとめ
なんだなあ。」と作者も噂を聞き期待していたものに出会ったとき
の驚きと喜びが、歌全体にみなぎっている。と下田忠氏は「万葉の
歌」の中で述べる。

うえ

うきね

よひ

波の上に 浮寝せし夜

あ

も

こころがな

何と思へか 心悲しく

いめ

夢に見えつる

卷十五—3639

作者・不詳

(解説) 波の上に船で泊った夜、何と思つて我妻が、いとしくも夢に現れたのであろうか。と都に置いてきた愛妻と会いたさかから悲しくなってしまうのだ。

◎この二首の歌の題詞は「大島の鳴門を過ぎて再宿(ふたよ)を経て後」に作つたとある。このことは、この海峡を通過する時に歌を作る余裕もなく必死になつて急潮を乗り越えたかを現していると思定できる。この海峡が万葉びとにとっていかに難所であつたかということを物語っている。

・万葉集に詠われている「大島の鳴門」、今の大島瀬戸は本土の柳井市と周防大島との間にあるが最狭部約700mと狭く最大潮流

9ノット(自転車で走る速さ)で潮が満ちてくるときは激しく東流

し、引くときは激しく西流する。潮流が停止するのは、わずかに三、四十分程であり古代の木造船ではここを乗り切るには常に危険を伴い、船に乗っている全員にとって命がけのときであったであろうと想定される。また、大潮や中潮の時には瀬戸内海の潮の干満の差によって渦潮が発生し昔から海の難所となっており多くの行き交う船の航行を苦しめてきたと伝えられる。

- ・大島瀬戸に架かる「大島大橋」の上から大潮・中潮時に下をながめれば海が大きな音をたて急流の川のように流れ、大きな渦が所々で発生し自然の力強さと雄大さを感じるが、それとともに恐怖心を感じた。

(写生地) 山陽本線大島駅から大島瀬戸と対岸に瀬戸内海で淡路島、小豆島に次ぐ3番目の大きな島、周防大島を描く。(杏花)



(大島瀬戸・周防大島の位置図)



(参考文献)

- ・ 日本古典文学大系「万葉集」・ 下田忠著「万葉の歌―中国・四国」
- ・ 東茂美著「遣新羅使人たちの歌」・ 大島観光協会ホームページ
- ・ 環境省・国立公園など